

自己決定の発達と学習意欲の発達との関係

筑波大学心理学系 新井 邦二郎

Relation of development of self-determination and motivation for learning

Kuniji Arai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study aimed to clarify the relation of development of self-determination and motivation for learning. The subjects were 98 elementary school children, 122 junior high school pupils, 120 senior high school students, and 85 college students. Both development of self-determination and motivation for learning were investigated by questionnaire. The main results were: (1) the three kinds of motivation, praise and punishment-related motivation, self esteem-related motivation, and self actualization-related motivation were found from factor analysis; (2) self-determination was positively correlated with all kinds of motivation in elementary school children; and (3) self-determination was negatively correlated with praise and punishment-related motivation, self esteem-related motivation from senior high school to college students, and the degree of negative correlation was larger than older students. These results were discussed from the viewpoint of development of self-determination and its positive relation to development of autonomy of motivation.

Key words: self-determination, autonomy of motivation, praise and punishment-related motivation, self esteem-related motivation, self actualization-related motivation.

問題と目的

自己決定が学習の内発的動機づけに必須の要素であるとする見解に基づいた研究がこれまで行われている (deCharms, 1968, 1976, 1984, Deci, 1975, 1980, Deci, & Ryan, 1985). これらの研究は、主に undermining 現象を通じて行われている (山地, 1988). 本研究は、これらの見解や研究にヒントを得ながら、発達という場面での自己決定と学習の動機づけとの関係を探る。自己決定の発達については、すでに調査を行ってきたが (新井, 1995, 1996), 本研究はそれらの研究のうえに立って、自己決定と学習意欲との関係を明らかにしようとする。

子どもの学習意欲の発達については、小学生時代、親の指示どおりの道を歩み、勉強をしてきた子どもが、思春期になり勉強の目的に疑問をもったとき、自分の全てをかけてきたその勉強をまったく放

棄してしまうことがときに見られる。このような事例の存在が、「子どもの自己決定の発達と学習意欲の発達との関係」を研究する意義を与えてくれる。新聞の投書欄に17歳の男子高校生安田英文君の次のような決意のこもった文書が掲載されていた。題して『自信を持って学校にいくぞ』である。要約して紹介してみる (下線は筆者)。

「中学での3年間、趣味、部活、そして、友達を捨てて勉強し、2年前、念願の高校に入学した。その瞬間、力が抜けた。目標がなくなった。去年は、なんとか進級したものの、『無気力状態』はひどくなっていった。

学校へ行って勉強する意味がわからなかった。すべてに嫌気がさし、自殺を試みたこともあった。何をしてもつまらなかった。だから、高校を辞めれば、精神的な苦しみから解放されると思い、辞めようと思っていた。

でも、最近になって、自分を冷静に見つめられる

ようになったとき、苦しみから逃げようとしている卑怯な自分に気付いた。学校は、他人のためでなく、自分のためにいくことがわかった。結局、4月からは、もう一度、2年生をやることになった。

しかし、この1年間で、学校の勉強では得られない、他人にはない『何か』を得られたような気がする。挫折したこの1年間を無駄にしないためにも、4月から自分に自信を持って、学校に行きたいと思う。」(朝日新聞平成9年3月25日の朝刊・東京版)子どもの学習意欲の発達は、連続的・直線的に進むとは考えにくい。小学校低学年の学習意欲が、そのまま中学生や高校生の学習意欲に連続してつながっていくものではなく、新たな要素がつけ加わり質的に異なったものに変わっていくと考えられる(Deci, 1985a, 1985b, Ryan, 1992, 速水, 1993, 速水・加藤, 1994)。多くの研究者が指摘する、その新しい要素とは、自律性である。この学習意欲の自律性は、これまで内面化(internalization)の結果と考えられてきているが、子ども側のもっと能動的なかわりの結果であると考えられる(新井, 1995)。

テストや通知表でよい点をあげると両親や先生がほめてくれたり喜んでくれたりしたことが勉強の励みになったという小学校低学年時代の思い出をもつ人は少なくない。この小学校低学年時代には、「私は、はたして誰のために勉強をしているのだろうか。自分、それとも親や教師のために？」といった疑問をもつ人は、まだほとんどいないであろう。この年齢では、両親や先生がほめてくれたり、喜んでくれたりする姿が、純粹に学習意欲の有力な要素になっていると考えてよいだろう(親からほめられることが学習意欲の中心になるので、これは「賞罰的学習意欲」と呼ぶことができるであろう)。さらに小学校高学年ごろからは、回りの人から高い評価を得て、自尊心を維持することも学習の有力な動機となっていくだろう(これは「自尊的学習意欲」と呼ぶことができるであろう)。しかし、思春期に入ると、両親や先生がほめてくれたり喜んでくれたりする姿や友人も含む回りの人が自分を高く評価してくれることは嬉しいけれど、それだけでは学習しようとする心が動かなくなる人が現れてくる。むしろ、両親や先生の喜ぶ姿の現れ方などが強ければ強いほど、それらがむしろ空虚に感じられ、学習意欲にマイナスに作用し始めてくることも少なくない。どうして、このように変化してくるのか。それは、この思春期における学習意欲の重要問題として、「学習が自分にとってどのような意味があるのか」という意識がクローズアップしてくるからであると考えられる。自分をとりまくさまざまな事象につい

て自分にとってどのような意味があるかを吟味する心のメカニズムを自我意識と呼ぶならば、この自我意識からこれまでの学習動機や意欲が「問い直し」を受けることになるのである。その結果、自分の人生の目標を実現するために学習が意味があると考えられるようになるならば、それは、その後の学習意欲の有力な要素になるだろう(このような学習意欲を「自己目標実現的学習意欲」と呼ぶことができるだろう)。同時に、この時期は一般的には思春期特有の反抗期に入り両親から積極的に距離をとり始めるので、両親や教師のために学習するという要素は急速に後退し縮小していくであろう。要約すれば、小学校低学年時代以来の学習意欲は思春期に入ると、自我意識の問い直しの洗礼を受け、それまで強力であった学習意欲が衰退し、子どもはそれに代って新たな学習意欲を選びとったり作り出したりして行かなければならないと言えるであろう。

学習意欲の発達を見ていくときに、思春期において「自分にとって意味のある学習意欲を選びとったり作り出したりしていく」子どもの作業を極めて重要なポイントとして取り出すことができる。そして子どもの自己決定の発達は、まさしくこの作業に影響を及ぼす大きな要因の一つになると仮説することができる。親の言いなりに行動を重ね自己決定経験を著しく欠如している子どもにあっては、おそらく「自分にとって意味のある学習意欲を選びとっていく」作業は困難を極めることであろう。子どもによっては、思春期であっても自我意識からはっきりとした問い直しを経ないで、親や教師の喜ぶ顔や悲しむ顔が学習意欲の有力な内容のまま進行していくケースもあり、こうした自律の極端に遅れる少数のケースの場合、発達上の諸問題がさらに後年に持ち越されていくことが見られる。しかし自己決定の発達の遅れから「自分にとって意味のある学習意欲を選びとっていく」ことが困難となるケースの多くの場合、思春期になると親や教師のために勉強を頑張るという意志や欲求が後退していくなかで、学習の一時的放棄という行動が生じてくる。この「問題と目的」の冒頭に記した投書の事例も、こうした経過のもとに発生したものと考えられる。それゆえ、小学校から中学校、中学校から高校・専門学校・大学へと学習意欲がその時期その時期で健全に発達していくためには、子どもの自己決定の発達が重要な役割を果たすと考えられる。

本研究は、子どもの自己決定の発達と学習意欲の発達の両者を調べることにより、この両者の関係を明らかにしたい。

方法

被調査者

公立小学校5年生98名(男子55名, 女子43名), 公立中学校1年生122名(男子60名, 女子62名), 公立高校1年生120名(男子77名, 女子43名), 国立大学1年生85名(男子31名, 女子54名).

調査時期

1996年9, 10月.

使用した尺度

1 自己決定意識尺度

佐藤・新井・谷島・松尾・天貝・崔(1996)が作成した25項目からなる尺度. 信頼性が確認されている. この尺度は, 「自己決定志向性」「他者決定を好まないこと」「自己決定の不安の少なさ」「自己決定のマイナス感情の少なさ」「自己決定の効力感」を内容としている. 回答は4件法である.

2 学習意欲の自律度質問紙

自律度の異なる学習意欲を見るために新たに作成した16項目からなる質問紙(Table 1参照). 項目例は「私が勉強しようとするときは, 先生から評価されたいという気持ちがあります」, 「私が勉強しようとするときは, 人から『かげ口』を言われたいという気持ちがあります」, 「私が勉強しようとするときは, 自分の将来の夢を実現したいという気持ちがあります」などである. どの程度自分にあてはまるかの判断で「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法で回答を求めた.

手続き

調査の実施は担任(授業者)の監督のもとに行われた. 質問紙は無記名であった.

結果と考察

1 自己決定意識の学年差と性差

Fig. 1が示すように, 男女とも学年が上がるにつれて自己決定意識の得点が増加している. また, どの学年においても男女差は見られない. 学年と性の2要因の分散分析の結果, 学年の主効果のみ1%水準で有意であった. LSD法による多重比較の結果, 中1は小5よりも, 高1は中1よりも, 5%水準で有意に自己決定意識の得点が高い.

2 学習意欲の自律度質問紙の因子分析と信頼性

この質問紙の下位尺度を抽出するために, 因子分析を行った. 主因子法により固有値1以上の3因子を抽出し, バリマックス回転を行った. その結果をTable 1に示す. 第1因子は, 「自分の将来の夢を

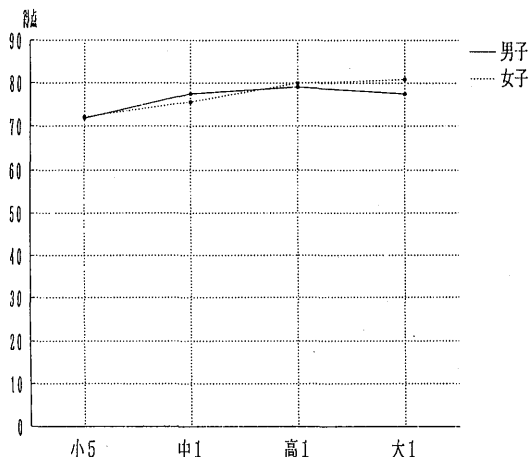


Fig. 1 自己決定意識の学年変化

実現したい」「将来の目標に近づきたい」などの8項目を含み, それらの項目の内容から「自己目標実現的学習意欲」と命名した. また第2因子は, 「友だちから注目されたい」「先生から評価されたい」などの4項目を含み, それらの項目の内容から「自尊的学習意欲」と命名した. さらに第3因子は, 「親や先生から文句を言われたい」「人から『陰口』を言われたい」などの4項目を含み, それらの項目の内容から「賞罰的学習意欲」と命名した. 各因子に対応して, それぞれの項目から構成される下位尺度を作成した.

下位尺度ごとの α 係数およびそこでの項目のI-T相関の数値を, Table 2に示す. I-T相関値はいずれの項目も, 約0.50以上であり, α 係数は0.70以上であり, 各下位尺度とも信頼性は認められたものと言えよう.

3 学習意欲の下位尺度の発達変化

まず賞罰的学習意欲は, Fig. 2が示すように, 男女とも学年が上がるにつれて低下していく傾向が示された. 性と学年の2要因による分散分析の結果, 性, 学年およびその相互作用とも1%水準で有意であった. 特徴的なのは, 中学1年の男女差であり(1%水準で有意), 女子のほうが男子よりもその賞罰的学習意欲の低下が明確である. このことは, 女子の精神的成熟が男子よりも早くスタートすることと無縁ではないであろう.

次に, 自尊的学習意欲については, Fig. 3が示すように, 学年の変化はあまり認められなかった. 性と学年の2要因による分散分析の結果, 性のみが1%水準で有意であった. 男子が女子よりも, 自尊的学

Table 1 学習意欲質問紙の因子分析結果

項目番号(内容)	因子負荷量			共通性	M(SD)
9 (将来の夢を実現したい)	.795	-.004	-.029	.633	3.18(.90)
16 (将来の目標に近付きたい)	.794	-.040	.046	.633	3.28(.85)
5 (希望する職業につきたい)	.742	-.039	.057	.555	3.07(.92)
10 (いい仕事ができる人になりたい)	.719	.138	.110	.548	3.10(.89)
6 (充実した人生を送りたい)	.659	.120	.039	.449	3.06(.85)
11 (りっぱな人間になりたい)	.642	.234	.188	.501	2.98(.93)
15 (有能な役割を果たしたい)	.529	.362	.213	.456	2.68(.94)
4 (知識や知恵を身に付けたい)	.489	.233	.077	.299	3.21(.81)
2 (友達から注目されたい)	.021	.719	.160	.544	1.94(.88)
1 (先生から評価されたい)	.027	.651	.266	.496	2.37(.95)
13 (人から認められたい)	.277	.536	.263	.434	2.71(.95)
12 (仲間に負けたくない)	.184	.412	.376	.345	2.75(.97)
7 (親や先生から文句を言われたくない)	-.008	.058	.725	.529	2.83(1.07)
3 (人から「陰口」を言われたくない)	.002	.316	.559	.412	2.53(1.14)
14 (恥ずかしい思いをしたくない)	.160	.358	.505	.408	2.77(.98)
8 (親の期待に応えたい)	.171	.276	.494	.350	2.53(.98)
固有値	3.86	1.98	1.75		
寄与率	29.7	14.1	3.7		

Table 2 各下位尺度のI-T相関値と α 係数

下位尺度	I-T相関値	α 係数
賞罰的学習意欲	.461~.532	.713
自尊的学習意欲	.463~.577	.741
自己目標実現的学習意欲	.492~.678	.853

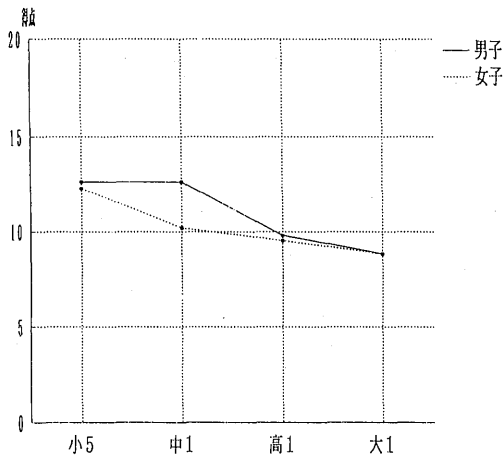


Fig. 2 賞罰的学習意欲の学年変化

習意欲が終始一貫して高く、この傾向はよく言えばプライド、悪く言えば面子に男子のほうが女子よりもこだわる傾向が強いことと符合している。

自己目標実現的学習意欲は、Fig. 4 が示すように、男子と女子とでは異なる変化を示した。性と学年の2要因による分散分析の結果、学年およびその相互作用が1%水準で有意であった。すなわち、女子は学年が上がるにつれて、自己目標実現的学習意欲も高まっていくが、男子では中学1年から高校1年にかけて大きく低下し(LSD法による多重比較で5%水準で有意)、高校1年から大学にかけては再び上昇している。特徴として、小学校や中学校では男子が高い自己目標実現的学習意欲を示すが、高校1年と大学では女子のほうが高い自己目標実現的学習意欲を示すことがあげられる。このように自己目標実現的学習意欲は中学1年から高校1年にかけて男女間で大きな逆転現象が見られた。このことは、女子の学習意欲の発達が発達傾向を示しやすいが、男子の学習意欲の発達においては小学校時代からの素朴な(無邪気という言い方もできるが)自己目標がそのまま高校や大学時代の自己目標につながらないという不連続を示しやすいことを示唆していると考えられる。

4 学習意欲下位尺度の相関の発達変化

Table 3 は、学習意欲下位尺度どうしの相関の学年変化を示す。賞罰的学習意欲と自尊的学習意欲と

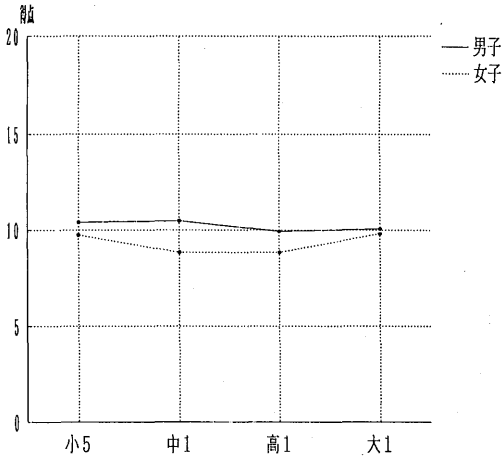


Fig. 3 自尊的学習意欲の学年変化

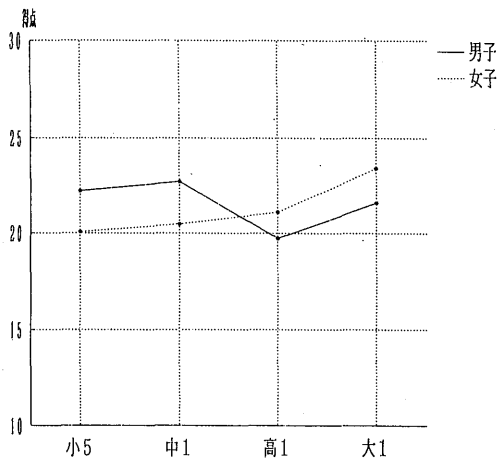


Fig. 4 自己目標実現学習意欲の学年変化

は、いずれの学年においても中程度の相関を示している、この両者の学習意欲が小学・中学・高校・大学のどの年齢においても密接な関係にあることを示している。一方、自己目標実現的学習意欲は賞罰的学習意欲や自尊的学習意欲との相関が小学・中学では中程度で統計的にも有意であるが、賞罰的学習意欲とは高校で、自尊的学習意欲とは大学で相関が低くなり、有意でなくなる。このことは、小学・中学においては自己目標実現的学習意欲は賞罰的学習意欲や自尊的学習意欲と調和的に併存しているが、高校や大学ではそれらとの調和的關係が崩れ、独自のものとして存在するようになってくることを示していよう。また、賞罰的学習意欲とは高校で、自尊的学習意欲とは大学で相関が低くなり、有意でなくなることは、発達の的には自己目標実現的学習意欲と

Table 3 各学習意欲間の相関の学年変化

	小5	中1	高1	大1
賞罰的学習意欲と自尊的学習意欲	.47**	.58**	.58**	.70**
賞罰的学習意欲と自己目標実現的学習意欲	.48**	.51**	.17	.19
自尊的学習意欲と自己目標実現的学習意欲	.43**	.42**	.33*	.20

*p<.05 **<.01

Table 4 自己決定意識と学習意欲下位尺度との相関の学年変化

	賞罰的	自尊的	自己目標実現的
自 小5	.12	.04	.20*
己 中1	-.08	-.12	.29**
決 高1	-.28**	-.05	.26**
定 大1	-.42**	-.38**	.29**

*p<.05 **<.01

賞罰的学習意欲との調和的關係が早めに崩れ、それにやや遅れて自己目標実現的学習意欲と自尊的学習意欲との調和的關係が崩れ始めていくことを示唆している。

5 自己決定意識と学習意欲との相関の発達変化

Table 4 は、自己決定意識と学習意欲との相関の学年変化を示す。賞罰的学習意欲と自己決定意識とは小5においてすでに相関が低く、中1からマイナスの相関を示し始め、高校、大学と学年が上がるにつれて、そのマイナスの値が大きくなっていく。同様に、自尊的学習意欲と自己決定意識とも小5においてすでに相関がほとんどなく、中1からマイナスの相関を示し始め、大学ではそのマイナスの値が大きくなっていく。このように、自己決定意識と賞罰的学習意欲、自尊的学習意欲とは、中学校からマイナスの關係を示し、それ以降マイナスの關係をいっそう強めている。このことは、中学生から自己決定意識は賞罰的学習意欲や自尊的学習意欲を抑制する關係に位置するようになることを示唆していよう。他方、自己目標実現的学習意欲と自己決定意識とは、小5においてすでに相関が有意であり、学年が上がるほどその相関が高くなる傾向が見られる。

このように、自己決定は賞罰的学習意欲と自尊的学習意欲とは、中学から抑制的關係を示し始め、自己目標実現的学習意欲に対しては小学生から促進

的關係をもち、学年が上がるとその促進的關係を強めていくと考えられる。

6 自己決定意識の低・中・高群からみた学習意欲

Fig. 5 は自己決定意識の低・中・高群からみた賞罰的学習意欲の学年変化を示す。分散分析の結果では小5から中1まで低・中・高群の得点に有意差は見られないが、高1では5%水準で有意差が見られ、LSD法による多重比較の結果、低群が高群よりも有意に得点が高いことが示され、また大1でも1%水準で有意差が見られ、LSD法による多重比較の結果、低群および中群が高群よりも有意に得点が高いことが示されている。このように高校以降では

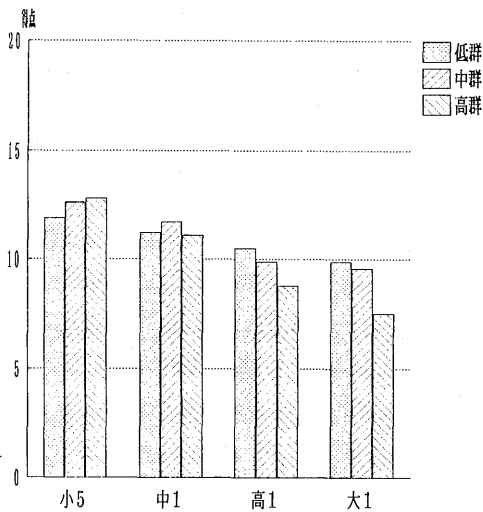


Fig. 5 自己決定高・中・低群の賞罰的学習意欲

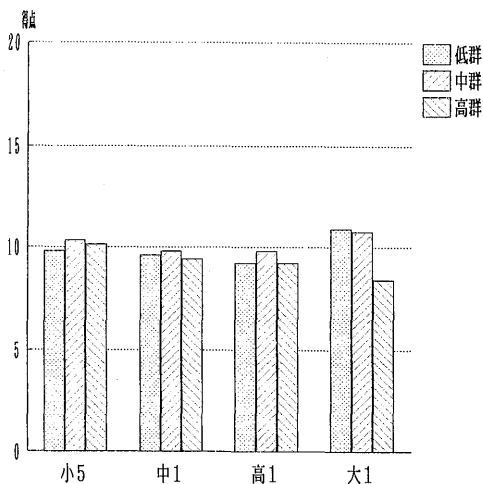


Fig. 6 自己決定高・中・低群の自尊的学習意欲

賞罰的学習意欲の場合、自己決定意識の低い人のほうが高い人よりも賞罰的学習意欲の得点が高くなる傾向が認められた。

Fig. 6 は自己決定意識の低・中・高群からみた自尊的学習意欲の学年変化を示す。分散分析の結果では小5から高1まで低・中・高群の得点に有意差は見られないが、大1で1%水準で有意差が見られ、LSD法による多重比較の結果、低群および中群が高群よりも有意に得点が高いことが示されている。このように高校以前では自尊的学習意欲の場合、自己決定意識の低・中・高による違いは見られないが、大学では自己意識の低・中の人の方が高い人よりも自尊的学習意欲の得点が高くなる傾向が認められた。

Fig. 7 は自己決定意識の低・中・高群からみた自己目標実現的学習意欲の学年変化を示す。分散分析の結果では小5で低・中・高群の得点に有意差は見られないが、中1では1%水準で有意差が見られ、LSD法による多重比較の結果、高群が低群よりも有意に得点が高いことが示され、また高1でも5%水準で有意差が見られ、LSD法による多重比較の結果、高群が低群よりも有意に得点が高いことが示されている。さらに、大1でも分散分析の結果は5%水準で有意差が見られ、LSD法による多重比較の結果、高群が低群よりも有意に得点が高いことが示されている。このように小学生を除くいずれの学年においても自己目標実現的学習意欲の場合、自己決定意識の高い人のほうが低い人よりも自己目標実現的学習意欲の得点が高くなる傾向が認められた。以上の結果を総合すると、自己決定は賞罰的学習意欲に

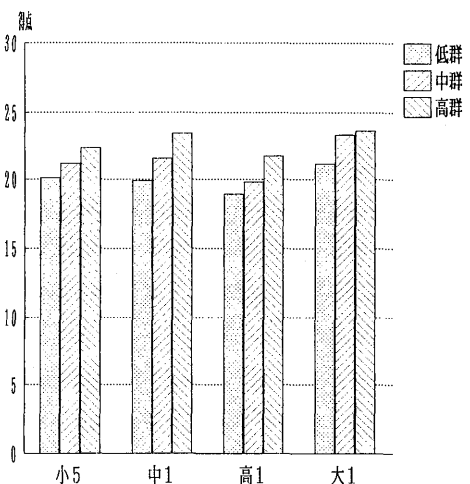


Fig. 7 自己決定高・中・低群の自己目標実現的学習意欲

対し高1で、自尊的学習意欲に対し大1で否定的な関係を示すが、自己目標実現的学習意欲に対しては中1以降、肯定的な関係を示していくと言えよう。

要約と結論

本研究では、子どもの自己決定の発達が、学習意欲の発達にも関係をもつことが明らかとなった。すなわち、親や教師からの期待に応えたり人から非難されたりすることを避けたりするために勉強しようとする賞罰的学習意欲や人から高い評価を得て自尊心を維持したり高めたりしようとして勉強しようとする自尊的学習意欲に対して、年齢が高くなると自己決定は抑制的な関係を示し、他方、自分を成長させ将来の目標や計画を実現しようとして勉強しようとする自己目標実現的学習意欲に対して促進的な関係を示した。

小学生のうち、賞罰的学習意欲も自尊的学習意欲も自己目標実現的学習意欲も相互共存的な関係を示しているが、中学さらに高校に至ると、そのうちの自己目標実現的学習意欲が分離し始め、賞罰的学習意欲や自尊的学習意欲とは別個の学習意欲の道をたどっていくことも、本研究は明らかにした。また、その分岐にあたって自己決定の発達がかわりを持ち、自己決定の発達は賞罰的学習意欲や自尊的学習意欲には抑制的に作用し、他方、自己目標実現的学習意欲には促進的に作用することが示唆された。

中学・高校以降の学習意欲としては、自己目標実現的学習意欲が中心部におさまる賞罰的学習意欲や自尊的学習意欲は周辺部に位置することが健全な姿と思われる。それゆえ、子どもの自己決定の発達は思春期以降の健全な学習意欲の発達にとって重要な役割を果たすと考えられる。

問題は、小学生のうち、上記のような関係が顕在化してこないで、学習意欲の発達の問題点が見えにくいことである。小学生のとき親の期待や指図どおりに勉強すること自体は問題とは言えないが、子どもの生活全般のなかに自己決定の発達が進行していないとすれば、問題をはらんでいると見ることができる。なぜなら、中学や高校に入り自己目標実現的学習意欲が有力な位置を占め始めてよい時機なのに、自己決定の発達の不足のため、それが育たず、相変わらず賞罰的学習意欲や自尊的学習意欲中心の学習状況のなかで、そこに疑問が生じることにより、学習の放棄という行動が発生する可能性があるからである。

小学生のときから、毎日の生活の中で子どもの自

己決定経験を大切にして、その意識や態度の成長をはかるようにすることが、長い目で見た学習意欲の健全な発達にとって必要であると言えよう。

引用文献

- 新井邦二郎 1995 やる気はどこから生まれるか—学習意欲の心理— 児童心理臨時増刊号『やる気を高める本』3-11.
- 新井邦二郎 1996 小学生の自己決定経験の調査 筑波大学心理学研究, 18, 75-95.
- 新井邦二郎 1997 中学・高校生の自己決定の調査 筑波大学心理学研究, 19, 7-19.
- deCharms,R. 1968 *Personal causation*. Academic Press.
- deCharms,R.(佐伯胖訳) 1976(1980) やる気を育てる教室 金子書房
- deCharms,R. 1984 Motivation enhancement in educational settings. In R.Ames & C.Ames(Eds.) *Research on Motivation in Education. Vol.1* Academic Press.
- Deci,E.L.(安藤延男・石田梅男訳) 1975(1980) 内発的動機づけ 誠信書房
- Deci,E.L.(石田梅男訳) 1980(1985) 自己決定の心理学 誠信書房
- Deci,E.L. & Ryan,R.M. 1985a *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Plenum Press
- Deci,E.L.& Ryan,R.M. 1985b The casual orientations scale:self-determination in personality. *Journal of research in personality*, 19, 109-134.
- 速水敏彦 1993 外発的動機づけと内発的動機づけの間—リンク信条の検討— 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科) 40, 77-88.
- 速水敏彦・加藤昌弘 1994 外発的動機づけと内発的動機づけの間 日本教育心理学会第36回総会論文集 362.
- Ryan,R.M. 1992 Agency and organization:intrinsic motivation, autonomy, and the self in psychological development. In J.E.Jacobs(Ed.) *Nebraska Symposium on Motivation:Developmental Perspective on Motivation*. The University of Nebraska Press
- 佐藤純・新井邦二郎・谷島弘仁・松尾直博・天貝由美子・崔京姫 1996 子どもの自己決定の発達に関する研究[3]—自己決定意識尺度の作成— 日本教育心理学会第38回総会論文集, 86.
- 山地弘起 1988 動機づけにおける自己決定性の検討 東京大学教育学部紀要 第28巻 317~325.
- 1997. 9. 30 受稿—